

岩手大学	正会員	岩佐正章
岩手大学	学生会員	○長崎直樹
岩手大学	学生会員	古館和弘

1. はじめに 都市における城址は歴史的に都市の核であって、都市の環境および情緒に大きな影響を及ぼしていると考えられる。本研究は弘前市の住民の城址公園である弘前公園に対する意識を調査したものである。調査対象者は居住地、勤務先、年齢、性別などを考慮して、つぎのように12の層に分類した。都心部勤務者として弘前市役所の職員、男性49人、女性48人、公園近隣の居住者(A)として、時敏小学校6年生の父親48人、母親40人、(B)として同じく城西小学校父親30人、母親44人、郊外居住者として第三大成小学校6年生の父親33人、母親34人、大学生として弘前大学学生男性47人、女性41人、高校生として弘前工業高校男性92人、弘前中央高校女性95人である。調査方法はアンケート用紙を配布して留め置き法によった。調査年月は昭和50年12月である。

2. 住民意識の測定方法 測定方法としてはSD法を用いた。SD法とは Semantic Differential (意味微分法)の略で、これは、2つの正反対の意味をもつ言葉を掲げ、その間をいくつかのカテゴリーに分け、調査者に該当するところに印を記入してもらうものである。本調査には普通を中心に、左右にそれぞれ、やや、かなり、非常に、として計7カテゴリーとした。評定尺度として選定した項目は41である。アンケート用紙を回収し、各層について、各項目ごとに、各カテゴリーに反応した調査者の数を集計する。このデータから、系列カテゴリー法によって、カテゴリー代表値を求めた。つぎにこの代表値を用いて、尺度間相関係数を算出し、因子分析(主因子法)により因子負荷量を求めた。因子分析は、さまざまな評定尺度のうち、本質的に同等のものをまとめ、より少数の次元で意味を表現しようとするものである。

3. 結果と考察 以上によって求められたカテゴリー代表値と因子負荷量は表-1に示すとおりである。因子負荷量は第Ⅵ因子まで求めたが、累積寄与率は第Ⅰ因子 64.2(%)、第Ⅱ因子までで76.0(%)、第Ⅲ因子までで85.1(%)、第Ⅳ因子までで92.2(%)であるが、ここでは第Ⅱ因子までを掲げた。

カテゴリー代表値を見ると、「弘前公園(城址)は街のシンボルと思う」という項は、高校生男性を除いて、他の11の層において、いずれも1~2位になっている。すなわち調査対象となったほとんど全部の住民に街のシンボルとして意識されていると言える。その他、各層に共通して41項目中10位以内に入っているのは、「街の目じるしと思う」、2~3の層を除いて入っているものは、「愛着を感じる」、「誇りに思う」、「伝統のある」という項目である。すなわち、弘前公園はほとんど全住民によって、街のシンボルであり、目じるしであって、強い愛着をもたれ、誇りと思われていると言える。

つぎに、因子負荷量について見ると、大部分が第Ⅰ因子に含まれる。そこで第Ⅱ因子が-のものと+のものに分ける。表-1において、-の方は、1:シンボルと思う ~ 5:伝統のあるまでを「象徴性」と名づけ、6:親しみのある ~ 14:快適なまでを「親近性」、+の方は、15:愛着を感じる ~ 19:ロマンのあるまでを「愛着性」、20:広々とした ~ 32:あたかいままでを「環境特性」、第Ⅱ因子、33:静かな ~ 37:開放的なまでを「活動性」と名づける。すなわち、弘前公園は、以上のような基準によって意識されていると考えられる。

4. おわりに 本研究は北大工学部土木工学科小川博三教授、五十嵐日出夫教授のご指導のもとに行なわれた、「オープンスペースに関する研究」の一環をなすものである。今回の計算にあたって、ご協力いただいた北大工学部大学院生小原恒平君に謝意を表す。

- 200 -